静岡県芸術祭／特別参加作品
浜松市芸術祭三〇周年記念 浜松放送劇団／劇団からっかぜ合同公演 主催◎浜松市教育委員会 主管◎浜松社会人演劇連盟
私の上に降る雪は
——二・二六余聞

木槿むくげの花のように、咲き続けて30年。

演劇は一回性の芸術だといわれる。舞台の進行と共に消えて行く。観客の胸に何が残ったか、それだけが生命である。しかし、だからこそ魅力がつきないともいえる。とにかく３０年、花は咲き続けた。

三十周年を記念して
浜松市教育委員会
教育長／相佐明一

昭和三十年第一回を開催し、本年三十回目を迎えた市芸術祭演劇部門の三十周年を記念して合同公演が開かれますことを心からお祝い申し上げます。

出演団体であります、浜松放送劇団『劇団からっかぜ』は、共に設立三十年余の歴史のある団体であります。また、自主公演、演劇教室、放送劇等、毎年実りのある活動を展開しており深く敬意を表わします。

このように、地域の劇団が息長く活動を継続していくことは、経済的にも人的にも大変ご苦労があろうかと思いますが、今日の三十周年記念の合同公演を大きな節目として演劇文化の発展が更に図られることを期待いたします。

浜松の青春譜
劇団からっかぜ
代表／布施佑一郎

る、三十年間の上演記録を見ると、それぞれの時代の青春の息づかいが聞こえてくる。芝居そのものの、あるいは楽屋の、場面転換の、暗転、明転の、カーテンコールの、それらの音が詩となって聞こえてくる。それはまさしく、浜松の戦後の青春譜といえよう。

そしてまた、この記録を見ると、地域と職場の、世相と風俗の、状況と思想のありさま、歴史の構図が見えてくる。そしてそこに、自分史が重なる。

ぼくらはもともと、持続する志を持って出発したわけではない。生きてることの証を、何とか芝居のなかに見つけ出そうと跪いている間にここまできてしまったわけだ。

顔に皺を刻ませて、三十年のまるを経て、今なお芝居を続けている者。芝居を始めたばかりで意気込んでいる者、あるいは立ち往生している者。この新旧の取り合わせを活かして、さらに新たなる青春譜を奏でて行きたいと思う。

地域劇団の使命
浜松放送劇団
代表／村越一哲

昭和二十二年に創立されましたので今年で三十七年の歴史をもつことになります。この間に劇団員の出演した作品（舞台、ラジオ、テレビ、映画）、は二千本を遙るかに越します。

十年ぐらい前から一貫して郷土に取材した創作劇に重点をおき、さもなくば浜松では上演されていない作品をとりあげて、郷土の観客の皆様と一体になった芝居づくりを心懸けています。……それが地方の劇団の使命であり存在価値でもあると考えているからです。

劇団からっかぜさんとは前にイプセン作「民衆の敵」でも合同でやりましたし、村越一哲作「遠州堀江藩始末・五千石の湖」でも応援をしていただき、今後も手を携えて地域の演劇文化の発展につくして参りたいと考えています。

又、この度はからずも浜松市の教育文化奨励賞をいただきました。

これを機会にます〳〵頑張って参る覚悟で御座居ますので今後とも御支援、御協力をお願い申上げたいと存じます。

静岡県芸術祭特別参加
浜松市芸術祭三〇周年記念　浜松放送劇団／からっかぜ合同公演

私の上に降る雪は

――二・二六余聞

●スタッフ

作……石崎一正
演出……（放送劇団）村越一哲
演出助手……（からっかぜ）平井新
同助手……（放送劇団）岡本和孝
舞台監督……（からっかぜ）中江みさと
同助手……（放送劇団）小栗雅
装置……（からっかぜ）布施佑一郎
小道具……（放送劇団）高崎勝則
効果……（放送劇団）三井康雄
同オペレーター……（放送劇団）大場寿子
照明……（放送劇団）小栗雅
照明……大石税
同オペレーター……（からっかぜ）宮下公平
メーキャップ……（からっかぜ）上村翔子
衣裳……（からっかぜ）安芸あゆみ
衣裳……（からっかぜ）西井学
着付……（放送劇団）中川まち子
制作……（放送劇団）古賀昭隆
衣裳協力……共同テレビジョン

●キャスト

絹子……（からっかぜ）古橋千絵
藤田たき……（からっかぜ）安野景
お咲……（からっかぜ）安芸あゆみ
玉江……（からっかぜ）上村麻美
早苗……（からっかぜ）伊藤直芽
花子……（からっかぜ）鈴木一恵
オリーブ（フミ）……（からっかぜ）青嶋南美
前沢民治……（放送劇団）鈴木尚志
岡部直吉……（からっかぜ）西井学
成川……（放送劇団）岡本和孝
石沢哲……（からっかぜ）深沢大助
斉田健三……（放送劇団）高崎勝則
真崎大将……（放送劇団）西脇章
栗原中尉……（からっかぜ）影山宜伸
香田大尉……（放送劇団）山田利明
法務官……（放送劇団）古賀昭隆
部隊長……（からっかぜ）高倉竜二
吉川……（放送劇団）嶋春善
花子の老父……（放送劇団）鈴木尚志
男一……（放送劇団）山田利明
男二……（放送劇団）嶋春善
男三……（からっかぜ）武以和人
青年……（からっかぜ）影山宜伸
中年男……（放送劇団）古賀昭隆
刑事A……（放送劇団）西脇章
刑事B……（からっかぜ）高倉竜二

●あらすじ

昭和十年、前年の東北の冷害で玉の井に売られてきた岡部とみ、源氏名絹子は陸軍第一師団歩兵第一連隊の前沢伍長と馴染みを重ね、今や相思相愛の間柄であった。

……そんな或る日絹子の実兄である岡部直吉一等兵が桃屋を訪れる。

直吉は、小学校卒業以来東京蔵前の斉藤家具店に小僧に出され、入営する迄の九年間をこの店で働いていたが妹が東京市向島区寺島町七丁目に勤めたとの手紙を貰い、小学校二年以来会わなかった妹に会うべく、いそいそと出掛けたもののそこが玉の井である事を知り、ショックを受ける。更に妹の馴染みが自分の上官である前沢伍長である事を知らされ、その場に居たたまれず倉皇として桃屋を去る。

その頃青年将校達は経済恐慌に見舞われ惨憺たる国内の状況が、重臣や財閥達の政治の故であると信じこみ、これ等を排して天皇の御親政を仰ぐと云う、所謂昭和維新を唱え着々とその実行を目論んでいた。

前沢伍長の上官、栗原中尉もその有力な一員であった。

栗原は前沢を自分の部屋に時々呼び、国家革新について話し、又、本も何冊か貸し与えて昭和維新の思想を鼓吹していた。

栗原の思想は、前沢に、そして岡部に伝わり、二人の下士官、兵は次第にそれが日本の生きる新しい道であると真剣に信じこんでいった。

昭和十一年、この年は珍らしく東京は年があけてから幾度も大雪に見舞われた。

二月二十三日に降り積った大雪が銀世界のように美しく見えたその二十六日早暁、積もった雪を蹴立てて栗原指揮の歩兵第一連隊三〇〇名の兵士は首相官邸に突入していった。

勿論、前沢も岡部もその渦中にあった……だが……。

汚れちまった悲しみに
今日も小雪の降りかかる
汚れちまった悲しみに
今日も風さえ吹きすぎる

〈中原中也・よごれちまった悲しみに〉より

私の上に降る雪は
真綿のやうでありました
私の上に降る雪は
霙（みぞれ）のやうでありました
私の上に降る雪は
霰（あられ）のやうに散りました
私の上に降る雪は
雹（ひょう）であるかと思はれた
私の上に降る雪は
ひどい吹雪とみえました
私の上に降る雪は
いとしめやかになりました

〈中原中也・生い立ちの歌〉より

風化される歴史のなかで

演出のことば／村越一哲

昭和四年十月、ウォール街を襲った〝暗黒の木曜日〟は世界恐慌の幕あけとなった。その上、昭和五年一月、浜口内閣による金解禁によって我の国の不況は苛烈をきわめた。商品市場、株式市場に大暴落が起ったが、大企業はいち早くカルテルを強化し生産制限を強行して、生存を可能ならしめた。そのシワは、中小零細企業や農村にあまねくよせられ、倒産、夜逃げなど窮乏のどん底につき落された。

〝大学は出たけれども〟と云う言葉がはやり、ルンペン、失業者は巷にあふれ、特に米の暴落による農村の惨状は〝山形県西小国村で、「十五才以上二十四才未満の娘四六七名中売られたもの一一〇名」と云う記録に表わされるように極限を超えていた。次いで昭和九年東北地方を襲った冷害は、これに更に追討ちをかけ〝娘身売の場合は当相談所に御出下さい〟と云う掲示が村役場にはり出されると云う有様であった。親兄弟の為、身を売ると云う美談(?)は歌舞伎の世界ではなく昭和の御代の現実の出来事であったのである。

こういう時代的背景をもとに五・一五、二・二六事件は起るべくして起ったとも云える。家のことが心配で軍務がおろそかになっていく部下の状態を心痛した青年将校達が〝昭和維新〟と称して決起したのである。然し彼等の単純で思慮に欠けた行動は当事者の意図と全く異り陸軍の派閥の醜い争いに利用されただけで終った。終っただけならまだしも、陸軍はこれを機会に〝私共はそれでかまいませんが青年将校達がどのように考え行動するかは保証の限りではありません〟と事あるごとに歴代の内閣を強迫し、着実に戦争への道へと驀進していったのである。

そう云った意味で昭和史に於ける二・二六事件のもつ意義は重大である。

核戦争三分前と云われる現在に於いて、私共はもう一度、この二・二六事件をふり返えり、改めて見つめ直す必要があるのではなからうか。

劇中の〝玉の井〟や〝兵営〟場面など戦後生れの若い演技者は理解し難いらしい。まさに二・二六事件は風化され、時代劇になりつつあると云えよう。

戦争や恐慌などは、それを知らぬ人達が増え始めると再び起ると云う鉄則がある。そう云う事にならぬよう絶えず私共は警戒の手をゆるめぬと共に啓蒙していく必要を痛感するものである。

かいせつ

玉の井の街

私娼街・玉の井は、永井荷風の「墨東綺譚」の舞台として名高い。荒川放水路と隅田川にはさまれた低地帯の街・玉の井は、細い横丁と路地が交錯し、どぶの臭いが漂う街だった。路地口の「ぬけられます」とか「安全通路」とかの看板が名物で、この看板を頼りに足を踏み入れると袋小路になっていて、「ねえ、チョイトチョイト」とよぶ声が聞こえた。

夏の蚊も名物だった。「墨東綺譚」には、繰り返し蚊の話が出てくる。

「家の内外に群がり鳴く蚊の声が耳立って、いかにも場末の裏町らしいわびしさが感じられる。」

「家じゅうにわめく蚊の群れは顔を刺すのみならず口の中へもとび込む」……。

私娼のいる家は、玉の井の場合、銘酒屋の看板を掲げていた。「市民権」を与えられていない売春宿であるため、表むき銘酒屋の看板を掲げたわけである。玉の井には、ざっと五百軒の銘酒屋が軒を並べ、私娼の数は千人を超えていた。この人肉市場に、最盛期には一日一万人の男がつめかけたという。

女たちの暮し

身を売って稼いだ金は、四分しか自分のものにならず、そこから食事代に始まり、ありとあらゆる経費が差し引かれた。病気になると、医者に支払うお金から生活費まで、すべて借金として自分の身にふりかかり、このため無理をしてお客をとり、命を縮めることとなった。

玉の井にある「玉の井啓運閣」という寺に、これら病死した女たちや水子の霊を慰めるため、観音像が建てられている。本堂には、引き取り手のない位牌が五十基余りも残されているという。

女たちの出身地

昭和九年（一九三四年）、警視庁が、その管下の芸娼妓・雇女（私娼婦）を調査したところ、総数一万九千人余りのうち、五千余人が東北出身者だった。この調査は、公娼中心のものであったから、実際には東北出身者の占める割合はもっと高かったと思われるが、それにしても多すぎるといわざるを得ない。

「女工哀史」は「農婦哀史」だといわれているが、「娼婦哀史」もまた「農婦哀史」であり「東北哀史」であった。男はオホーツクの海に蟹工船の乗組員として出稼ぎに出掛け、女は製糸工場に、そして花柳界にと縛られに出掛けた。

戦前の東北は、絶対主義的天皇制を支えた柱の一つ、地主階級の力が圧倒的に強く、小作農民は、慢性的な飢餓にさらされていた。年中借金を背負い、ちょっとした冷害に見舞われても、たちまち悲劇が生まれた。自殺者、子どもの間引き、娘売りは後を絶たなかった。

とりわけ、天明・天保以来の大凶作といわれた昭和九年（一九三四年）は深刻を窮めた。「娘身売の場合ご相談下さい」という貼紙が役場の掲示板に出され、農村の子女の身売りが、公然と役場で斡旋される始末だった。

この年の十二月十六日、秋田県の新聞「秋田魁新報」は次のように報じている。

「横手発午後三時四十一分上野直行は身売り列車だ。銘仙に白足袋、斑な白粉が一見して直ぐそれと分る〈離村女性〉が歳末が近づくに伴い、毎日のように身売列車で運ばれ駅の改札子を驚かしている。」

この作品の主人公・絹子もまた、雪の舞う十二月中ごろ、横手発午後三時四十一分上野直行列車に乗車し、玉の井に沈んで行ったものと思われる。

二・二六事件

この事件については、多くの本が出ており、また演出のことばでも触れられているので多くは述べない。ただ事件の性格のなかに、この農村の窮状を何とか救いたいとする考えがあったことは確かである。しかしこの叛乱は、結果的にはファシズム体制への捨て石にされただけである。

青年将校たちの、主観と結果の落差は喜劇的ですらある。彼らは軍隊という社会に育ち、そこが生活のすべてであり、民衆の生活とは離れていた。

しかし何も知らされずに駆り立てられた下級の兵士たちにとっては、悲劇以外の何ものでもなかった。軍部不信を口にする、終幕近くの岡部直吉のセリフのなかに、この事件の性格と帝国軍隊の矛盾がクッキリと浮かんでいるといえよう。

（文・深沢）

浜松市芸術祭／三十年の記録

昭三〇年（一九五五年）～昭五九年（一九八四年）

●回数（年度）	●作品名	●上演団体名
第一回（昭三〇年）	もう少しだ待ってろ	国鉄浜松工場演劇部
	むじな沢のはなし	笠井青年会
	村の保守党	劇団からっかぜ
	明日を告げる鏡	新津青年会
	深い疵	芳川青年会
	血祭	劇団ひくまの
第二回（昭三一年）	長女	長上青年会
	国鏡の夜	吉野青年会
	笛	劇研ひくまの
	思い出を売る男	広沢青年会
	帰郷	劇団からっかぜ
	終列車の男	大和染工
	けつまづいてもころんでも	長上青年会
	にせあかしや	内外編物演劇部
	紙飛行機	飯田青年会
	めんどり	本田技研演劇部
	雪の山	劇研ひくまの
	めでたい座敷	劇団からっかぜ
第三回（昭三二年）	収穫期	白脇青年会
	祝い日	大和染工演劇部
	修禅寺物語	松菱演劇部
	若い炎	内外編物演劇部
	死神やらい	長上青年会
	みちずれ	劇研ひくまの・たけのこ
	人斬り以蔵	劇団からっかぜ
	峠の青春	神久呂青年会
	川上観音	本田技研演劇部
	燈台	演研青い猫
第四回（昭三三年）	虚構の城	浜松放送劇団
	カラールのかみさんの銃	劇団麦
	密林地帯	浜松放送劇団
	よだかの星	劇団なかま
	さっぱ夜話	国鉄浜松工場演劇部
	村人	庄内青年会
	象の死	新津青年会
第十二回（昭四一年）	赤い陣羽織	劇団だるま
	三年寝太郎	劇団石っころ
	さっぱ夜話	国鉄浜松工場演劇部
	彼らはわたしを追ってくる	劇団なかま
	一族再会	浜松放送劇団
第十三回（昭四二年）	燈台	浜松放送劇団
	みみずと礫	新津青年会「浜っ子」
	乞食の歌	劇団だるま
	半陰陽撒羅米の懐任	カリギュラ67
	黒い太陽	劇団からっかぜ
第十四回（昭四三年）	天使が二人天降る	劇団だるま
	瓜子姫とアマンジャク	浜松放送劇団
	濁流	国鉄・いずみ合同
	ピカの蔭から	劇団からっかぜ
第十五回（昭四四年）	民衆の敵	放送劇団・だるま・からっかぜ・国鉄
	乞食の歌	サークルあし
	カリギュラ'69	カリギュラ'69
	蚊座禅	サークル11月会
	青い鳥	青年演劇愛好会
第十六回（昭四五年）	とける魚とエリナリグビーの歌	青年演劇愛好会
	9月の日々の中で	カリギュラ'70
第十一回（昭四十年）		
第十回（昭三九年）		

第五回（昭三四年）

二十才……笠井青年会
秋の歌……演研青い猫
こいこく……新津青年会
ロートル選手……劇研竹の子
河童退散……芳川青年会
怒りんぼ人情……内外編物演劇部
おらあおまえのもぐらもち……サークルだるまの会
おやじ……長上青年会
制服……劇団からっかぜ
鏡草子……内外編物演劇部
麦踏み……笠井青年会
ありふれた奇蹟……サークルだるまの会
祝い日……国鉄浜松工場演劇部
もう少しだ待っていろ……劇団若い群
よめっこ……新津青年会
厚い壁……芳川青年会
襤褸の歌……劇団からっかぜ
三年寝太郎……国鉄浜松工場演劇部
制服……劇団からっかぜ
屋上の狂人……国鉄浜松工場演劇部
鋏鋏(はさみ)……劇団若いむれ
逃散……新津部会
村の保守党……劇団からっかぜ
夕鶴……劇団だるま
風の中……東部部会
ピエール・バトラン先生……劇団だるま
廃園……劇団若いむれ
むこえらび……本田技研演劇部
白夜……浜松放送劇団
姨捨……新津青年会
わが青春のときに……劇団なかま
この小児……国鉄浜松工場演劇部
寒鴨……新津青年会
彦市ばなし……劇団だるま

第六回（昭三五年）

蟹……放送劇団・だるま・国鉄
人を喰った話……劇団からっかぜ
夕鶴……豊田村青年学級
祝い日……北浜青年学園
作品コンテンツ二〇七……18世紀フランス演劇研究会
獅子……劇団　劇団からっかぜ
ブラックコメディ……放送劇団・だるま・国鉄
象の死……引佐町青年学級
逃散……佐久間町劇団茶の実
悪党……劇団だるま
息子……劇団いずみ
財産没収……抒情の前線
麦踏み……浜松放送劇団
夜……劇団からっかぜ
ある死神の話……劇団季節
マッチ売りの少女……演劇サークルあし
薔薇のベビィ……引佐町青年学級
国定忠治……雅座
ラブフラワーエンジェルス……'73カリギュラ
瓜子姫とアマンジャク……劇団季節
黄色いパラソルと黒いコーモリ傘……サークルあし
冬の雷……浜松放送劇団
花刀……劇団からっかぜ
薔薇のベビィ……サークル鬼の村
神無月……劇団みやま
にんじん……劇団サークル鬼の村
たつのおとしご……浜松放送劇団
トマトフィリア・怒りのヌンチャク……演劇を育てる会
とろいめらい……劇団からっかぜ
ある群れ……劇団サークル鬼の村
彦市ばなし……劇団からっかぜ
狂言ミュージカル「ぶす」……浜松放送劇団
踊って歌おう……鬼の村
次郎かかし……浜松放送劇団(影絵)

第七回（昭三六年）

第八回（昭三七年）

第九回（昭三八年）

第十回（昭三九年）

第十七回（昭四六年）

第十八回（昭四七年）

第十九回（昭四八年）

第二十回（昭四九年）

第二一回（昭五十年）

●回数（年度）	●作品名	●上演団体名
第二一回（昭五一年）	結婚の申込み	劇団からっかぜ
第二二回（昭五一年）	泣き虫アクマ	演劇サークル鬼の村
	これでドラマが書ける	浜松放送劇団
	わんぱく地獄破り	劇団からっかぜ
第二三回（昭五二年）	真夏の夜の夢	劇団サークル鬼の村
	くみひも	浜松放送劇団
第二四回（昭五三年）	愛の証し	劇団からっかぜ
	結婚の申し込み	劇団からっかぜ
	狐	浜松放送劇団
第二五回（昭五四年）	黒い太陽	劇団サークル鬼の村
	おしゃり	浜松放送劇団
第二六回（昭五五年）	昔噺「打出之小槌物語」	浜松放送劇団

●回数（年度）	●作品名	●上演団体名
第二六回（昭五六年）	はやてに走れ、あまんじゃく	劇団からっかぜ
	萩の花	劇団ちゃ茶
	ダイナマイトと蛙たち	劇団サークル鬼の村
第二七回（昭五六年）	息子	劇団からっかぜ
	ある遅い出発	劇団サークル鬼の村
	逃散	浜松放送劇団
第二八回（昭五七年）	釘	劇団ちゃ茶
	ただ一筋にこそ	浜松放送劇団
	人を喰った話	劇団からっかぜ
	幽霊学校	劇団サークル鬼の村
第二九回（昭五八年）	熱海殺人事件	浜松放送劇団
第三十回（昭五九年）	私の上に降る雪は	からっかぜ／放送劇団合同

●浜松放送劇団のお知らせ

劇団員募集中

五十才台から下は中学二年生までの劇団員が居るきわめて年代的にバラエティにとんだ劇団です。

歴史も古く、劇団員の中には代議士になった人、作家になった人、放送局長になった人、勿論俳優になった人、演劇関係の大学に進学した人など多勢おります。

舞台は勿論のことですが放送や映画などにも関心のある方は是非とも御一報下さい。

経験は問いません。演技者ばかりでなく、装置、効果、美術演出などスタッフの部門をやらうと云う方も大歓迎です。

申込先・浜松市鍛冶町一四〇の四
丸市商事内　村越一哲宛
電話　五四―八一五一

劇団からっかぜ／次回公演

ブンナよ、木からおりてこい

水上勉・作
小松幹生・脚色
布施佑一郎・演出

とき●五月／十八(土)・十九(日)
ところ●浜松福祉文化会館ホール

出演者／スタッフ募集中

ケイコは週三回。月・水・金の夜七時から九時まで。週三回全部のケイコに参加できなくても結構です。また、経験は何ら問いません。気軽にお申し込みください。

申し込み方法●住所・氏名・年令を明記の上、浜松市鴨江町六一―四劇団からっかぜ事務局までハガキにてお申し込みください。お問い合せはTEL五三―九二八九(布施宅)

●劇団からっかぜのお知らせ